

吾輩は猫が好きではない（二）

木藤隆雄

前回、漱石の俳句は変化に富んでいると書いた。

「限りなき春の風なり馬の上」といった味わい深い句もあれば、威勢のいいリズムカルな句もある。

ひがしにしみなみきた
東西南北より吹雪哉

脱いで丸めて捨てて行くなり更衣

親友の子規は漱石の俳句について、「我俳句仲間に於いて俳句に滑稽趣味を發揮して成功したる者は漱石なり」と評している。又「真の滑稽は、真面目な人に宿る」とも言っている。真面目な顔をした漱石であるが、実は「滑稽」が大好きだったのだ。

ぶつぶつと大なるたにしの不平かな

うかうかと我門通る月夜かな

朝貌や惚れた女も二三日

これは、好きな女性と結婚できず悩んでいた教え子の松根東洋城に送った句。ユーモアのオブラートに包んで慰めているのだ。漱石の優しさが伝わってくる。

叩かれて昼の蚊を吐く木魚哉

この句に接した時、最初に頭に浮かんだのが、「馬の尻に吹きとばされし螢哉」という一茶の句。後日、日本女子大学熊坂敦子名誉教授の「漱石の俳句」という論文を読んでいたら、「漱石の俳句は、子規が、滑稽・諷刺・慈愛の三特色を挙げた一茶に近いものを持っていたのではないかと考える」とあり、納得した。どちらも「おかしさ」の中に、螢や蚊といった「小さきものへの愛情」が感じられ心がなごむ。

秋風の聞えぬ土に埋めてやりぬ

これは、飼い犬「ヘクター」の墓標に記した句。「吾輩は猫である」で世に出た漱石であるが、実は漱石は犬派だった。

大正四年、報知新聞のインタビューで、記者が好きなものについて尋ねている。「お好きなものは、時々お書きになる物に出て来るようですが、例えば猫とか文鳥とか…」。これに対し漱石は、「猫はとんだ有名なものになりましたが、好きではありませんよ」と笑って答えたという。

この記者の名前は野村長一。彼は、後に「銭形平次」を世に出し、人気作家となった「野村胡堂」である。つまり、作家になる前の野村が、当時、既に大作家だった漱石にインタビューしているのだ。人との出会いほど不思議なものはない。

若き日、漱石は建築家を目指していたが、米山保三郎という友人のすすめで文学の道に進んだ。

ある時、「ホトトギス」に載せる小説を書いてくれと高浜虚子に頼まれ、たまたま漱石の家に迷い込んだ野良猫をヒントに、「吾輩は猫である」を書いた。

もし野良猫が迷い込まなかったら、猫目線人間を観察するというこの作品は生まれなかったかもしれない。米山保三郎との出会い、猫との出会いが、漱石を文豪へ導いたともいえる。

犬派の漱石だが、猫の句も詠んでいる。

猫知らず寺に飼はれて恋わたる

漱石は、下五を「恋をする」としていたが、子規が、「恋わたる」に直したという。

子規と出会うことによって、漱石の俳句の才能は大きく花開いた。素晴らしい出会いだった。